

# 生き延びる力～戦中・戦後の体験談を聞く（後編）

岡本 和久

先月に続き、戦中・戦後の体験談を伺いました。痛感するのは、いかにわれわれがいる現在の環境が恵まれているかということです。このありがたい状況で、いかに「生き延びる力」を磨くのかというのは大きな課題です。せめて、あらゆることにチャレンジしていく気持ちを持ち続けることが大切だと思います。最後に島田知保さんと対談をさせていただきました。

## 鳥山百代さん

現在、83歳の鳥山さんは京城生れです。今はお孫さんたちに囲まれ、相変わらず活発に活動されています。しかし、まったく普通の「女の子」が体験した戦中と戦後は想像を絶するものでした。

## 初めて見る日本は緑がきれいだった

私は1928年(昭和3年)に京城、現在の京城(ソウル)で生まれて、今年で83歳になります。父は広島安芸吉田の農家の四男で、新天地を求めて韓国に行き、製麺業を始めました。当時、韓国は日本でしたからね。母は17歳で広島から京城へ行き、8歳年上の父と結婚したそうです。仕事が軌道に乗るまでは二人ともずいぶん必死に働いたようです。京城にあった三越にも麺を卸していたと聞いています。

私が終戦を迎えたのは17歳でしたが、それまでは実に満ち足りた生活を送っていました。百(もも)お嬢様と呼ばれて、使用人もたくさんいました。私が通った小学校は日本人だけで、明洞(ミョンドン)に近い南山という所にある学校でした。韓国の人たちともごく普通に付き合っていたと記憶しています。もちろん、日本人は支配する側でしたから、肉体労働などはせず、もっぱら韓国の人がするというようなことはありませんでした。

警戒警報や空襲警報が時々鳴ったり、偵察機などが来たりしましたが、実際に爆撃されることはありませんでした。しかし、灯火管制はありましたし、家には細菌戦に備えて防毒マスクなどもありました。

私は五年制の高等女学校に通っていましたが、昭和20年、繰り上げ卒業といって4年生の私も5年生と一緒に卒業させられました。玉音放送のあった8月15日は、進学した女子専門学校の夏休みでしたので家にいたのですが、ラジオの電波の状態が悪く、「以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス」というところしか聞こえませんでした。でも、なんとなく「敗けたんじゃないかな」ということはわかりました。

役人や知識人の中には敗戦の前に荷物を日本に送り、ご自身も日本に帰っているという人もいたようです。でも、私たち一般人は報道を信じ、ある意味洗脳されていましたから、呆然とするばかりでした。そうしているうちに韓国の人たちが「マンセー、マンセー」と町で騒ぎだしました。勝利を祝っていたのでしょう。

姉と私は何をされるかわからないというので、家の中に囲われてしまいました。押入れに抜け穴を造ったりしました。流言飛語が飛び交い、みんな警戒していました。外へ出ないので社会の様子はあまりわからなかったのですが、デマもかなりあったと思います。ソ連や満州まではある程度の距離があったので、比較的秩序だったのではないかと思います。



姉が徴用逃れで海軍関係の職場に勤めていました。幸いなことにその関係もあって、引き揚げ列車の切符が意外に早く手に入りました。とにかく住んでいる所が日本ではなくなってしまったので、そこには居られないのです。仏壇とか、神棚、おひな様などを庭で燃やしましたが、人形(ひとがた)のものを燃やすというのは忘れられない記憶ですね。

一人が持って帰れる荷物は手で持てる範囲に限られていました。私は大きなリュックサックを持ちましたが、母は喘息の真ん中の弟をおぶっていたのでリュックを持つことができません。一番下の弟は小学校低学年なので大きな荷物は持てず、本当に大事な物だけを持って帰るだけでした。写真はアルバムから剥がして持ち帰りました。

当時、かなりのおカネを出せば、闇ルートで荷物を運んでくれる「闇船」というのがありました。両親はそれで荷物を送ったのですが、帰国後、ずっと首を長くして待っていましたがとうとう届きませんでした。

帰国するまではやかんと飯盒、お米を持って歩いていました。釜山で20日間ぐらい引揚船を待ちましたが、その間は本当に難民でしたね。満州から逃げてきた軍人さんたちがかなりいたのですが、その人たちは身ひとつで逃げているので荷物がありません。それで頼むと持ってくれたのです。それは本当に助かりました。もちろん食べ物の差し入れなどはないですから、みんな、自分で食べ物を調達していました。まあ、おカネを出せば買えたということでしょうね。

母はかなり不利な闇レートで日本円に交換をして、それを日本に持ち帰ろうとしました。おカネを持ち帰る方法については水筒の中に入れるとか、いろいろな話を聞きましたが、誰でも気づく方法はみんなバレてしまいます。船に乗る前に全員が身体検査をされるからです。女性の場合、韓国の女性が身体検査をしました。母は身体検査で見つからないようにするため、段ボールの波の部分の部分を切ってそこにお札を入れ、糊で貼り直してトランクのような形にして持っていました。



幸い見つからずに持ち帰れた何万円のおカネは、帰国後非常に役立ちました。当時のおカネで家が十分に建つ金額ぐらいありました。まだ戦時中の昭和17～18年ごろでしょうか、5000円を日本に送金してそれで田畑を買っておいたぐらいですから、数万円というのは大変な金額だったのです。

帰国後、その田畑で採れたもので、十分ではないけれど家族8人が芋粥で糊口をしのぐぐらいのことはできました。帰国した年もちょうど9月に帰ったので、現物で小作米が入りましたから、それは助かりました。

興安丸という船で日本に帰ったのですが、船に乗ったときに船員さんが「お帰りなさい、もう大丈夫ですよ」と言ってくれたことが本当

にうれしかったです。安堵感、もう大丈夫だという思い、これは筆舌に尽くしがたいものでしたね。私たちは子どもでしたが、両親はもっとホッとしただろうと思います。一晩で玄界灘を越えて、山口県の仙崎の港に着きました。本当に緑がきれいだなと思ったのを覚えています。緑のなかに柿の実がなっていた。それが印象に残っています。

そして、驚いたのはすげがさに緋(かすり)の着物で日本人女性が肉体労働をしている姿を見たことでした。それまでは肉体労働をするのは韓国の人で、日本人が働くのを見たことがなかったのです。「日本人がこんなに働いている」ということが驚きだったというのは、今から考えると恐ろしいことでもありますね。それから、日本にはどんな山間部に行っても立派な小学校がある、韓国では当時、小学校は義務教育はなかったと思いますので、日本での教育の普及ぶりがよくわかりました。

仙崎から下関まで貨物列車で移動、山陽本線で広島まで来ました。印象深かったのは徳山の海軍工廠が全滅していたことでした。そして、被爆後の広島に到着しましたが、そこは焼け野原。何にもない。福屋というデパートの残骸が見えるだけでした。放射能が出ているかもしれないといううわさがあり、汽車に乗っているときは絶対に外に出てはだめだと言われました。

広島を少し先の祖母の家で一泊しました。そのときに着物を脱いで、五右衛門風呂で着物を煮沸したのを覚えています。シラミを除去したのです。シラミがいっぱい体についていたのです。そのときに裏の山で大きな次郎柿がなっていました。なぜかはわかりませんが、娘心に日本中どこにいても柿があるというのが印象的だったようです。韓国では街中に住んでいましたからね。

韓国では親戚がほとんどいませんでしたから、日本に帰ってきて、親戚の子とはすぐに仲良くなりました。祖母が「やっぱり血のつながったものなのう」と言ったのも記憶に残っています。

最終的には父母のふるさとの吉田に着きました。父の兄が大八車を引っ張って迎えに来てくれ、「これからは荷物を背負わないでいい」と言われたのがとてもうれしかったです。それで祖母の本家の一部屋でお世話になることになりました。四畳半一間、そこに8人が寝起きしていました。隠居所でしたがお勝手などちゃんと独立して生活ができるようになっていました。冬はあんかに足をつっ込んで、みんなが放射線状になって寝ていました。

父は京城にいるときから呆然状態でした。すべてを失ってしまったのですから無理ありません。でも、先ほどお話したように、米だけは買っておいだ田畑で収穫がありました。しかし、牛を持っていません。肩身が狭いというか、牛を借りたら、何日分の労働力で返さなければならないのです。田植えは共同作業です。そのなかで牛を持っていないということではかにされる。だんだん、厄介者を抱え込んだということで祖母の立場が苦しくなる。気の毒だということで、姉は大津の東洋レーヨンに職を見つけて出ていきました。

私は広島女専への転校試験を受けて合格をしていました。しかし、親から「男の子が3人いるから、悪いけど女のあなたは進学をあきらめてくれ」と言われました。母は泣いて頼むのです。「それならどうして転校試験を受けさせたのだ」と思ったものです。一週間ぐらい泣きあかして、そして進学をあきらめました。

長男は学費のいらない師範学校に行き、卒業してから東京の江戸川区の学校の先生になりました。そのまま田舎にいても将来性がないですから、それを機に田畑を売ってみんなで東京に出てきました。それで家族全員で働き、下の弟は奨学金をもらって何とか家計が安定してきました。父母は子ども相手のお菓子屋を営みながら、つぼ焼き芋を売ったりして生活を支えていました。貧しいなかでも借金などはなく、質屋にもいかなかった。進学をあきらめた私は、健康保険組合で経理の仕事をしていました。みんな、とにかく必死に働きました。

今、私が一番感じるのは、教育の恐ろしさということです。私たちも言われるままに政府のいうことを信じていた。みんな、何の疑問もなく戦争の勝利を信じていた。良い面でも悪い面でも教育の力はすごいものがあります。総理大臣にははっきりしてもらいたいですね(笑)。若い人には大所高所から世の中を見るような目を養ってほしい。そして、判断力のある人間になってほしいと思います。

私も娘たちを判断力のある人間になってもらいたいと思って育ててきました。私の子育ての基本でしたね。善悪、右にいか、左にいか、自分がどのような行動をしたらよいかというときに、判断する力を持ってもらいたいと思っていました。そのために学校にも行ってほしいし、経験も積んでほしい。私も子どもに的確なアドバイスができるような親になりたいといつも思っていました。成績がどうかとかいうことよりも、正しい判断ができるということの方がはるかに重要です。ひたすらそれを願っていました。

今の日本の教育は少し甘すぎるのではないのでしょうか。会津藩の「什(じゅう)の掟」に「ならぬことはならぬものです」という教えがありますが、駄目なものは駄目という教育が必要だと思います。若い人には「希望」を持ってほしい。私たちは何もなかったけれど無我夢中で働いてきた。そしていつもネガティブにならず、将来に夢を持って生きてきました。戦後のものすごいインフレのなかでも、とにかく希望を持ち続けてきた。おカネよりもモノの時代でした。だから今でもモノを捨てられない(笑)。給料がいくら上がっても追いつかない。おカネよりもお米のほうがありがたかった。そんな時代があったのです。でも、将来が明るかったですね。

今は豊かになりすぎたのかもしれませんが。一方で希望がなくなってきた。私が戦後、一番欲しかった物がミシンでした。それを得たときの喜びは忘れられません。今は満ち足りていてそのような喜びがなくなっているのかもしれませんがね。まあ、急に貧乏になれといっても難しいですけどね。

東日本大震災のとき、日本中の人たちが何とか自分も役に立ちたいと思ったでしょう。あの一瞬の気持ちを忘れないことです。モノは豊かになっても、心の豊かさはまだまだです。これからは心の豊かさに将来の明るさを求めていくべきだろうと思いますね。戦後、引揚者たちは一瞬にしてすべてを失いました。神戸の震災も、昨年の震災も多くの人があつという間に多くのものをなくしてしまいました。でも、何が起っても身につけた腕や知識はなくなりません。ですから、若い人にはしっかりそのような生き延びるための力をつけておいて欲しいですね。

## 宮崎一幸さん

経済ジャーナリスト、インテリジェンス・ユー代表

東洋経済新報社に長く勤められた宮崎さんに、今回は母上の手記を提供していただき、また貴重なお話も伺わせていただきました。

私の父は島原の農家の出身でした。当時は5男坊、6男坊には相続する畑もなく、結局満州に行ったのだと思います。満州といっても近いですからね。東京に行くよりも、もっと簡単に行けました。父は、満州の学校で土木工学を学んだようでした。母は親戚の関係で満州に行き、父とは満州での見合い結婚だったようです。

私は昭和16年(1941年)2月に哈爾濱(ハルピン)で生まれ、5歳まで暮らしました。父は黒竜江の大きな仕事にかかわり、その支部長になっていました。当時は家と役所が一緒のようなもので、土地も3000坪ぐらいありました。

7月になると、もう秋の訪れで庭中にコスモスが咲く。そこに馬車で冬のオンドル用の材木を一日中運び込んでいた。そこで姉と砂遊びをしていたことを覚えています。満州人の使用人やロシア人のコックさんまでいました。

もうひとつ覚えているのは、のべつ宴会をしていたこと。料理屋などそんなにないですからね。うちには50人前ぐらいのお膳がありました。関東軍の人は宴会をするところがないので、うちに来ていたような感じでした。軍人さんは甘いものなどたくさん持っていた。ですから羊羹をくれたり、あめをくれたり、当時は珍しかったチョコレートをもったりしました。よく覚えていますよ。芸者さんもしょっちゅう家に来て、どんちゃん騒ぎをしていました。



宮崎一幸さんの母上、宮崎静江さんの手記より(以下、囲みはすべて)

北満の果て、国境の町、黒河(コッカ、現在・中国黒龍江省愛輝、アイホイ)。私達一家はこの静かな町に、二年余り住みついた。広大な黒竜江の対岸はロシアのブラゴエ(ブラゴベシチエンスク)で、時折小さな人影がみえる。ロシア牽制のためか黒河のネオンはいつも灯っている。七月末には一家揃って黒竜江の花火見物と酒落こんだ。昭和二十年八月十二日、冬物の整理もすんで、やれやれと一息ついて庭に目をやると東菊が咲き始めていた。掃除も念を入れて、明日あたり長崎のおばあちゃんを奉天まで見送りに行った夫も帰って来ると思い、部屋に東菊を活けておいた。「組長さん、集合してください。」との声に表に出る。

ロシアとの戦いが始まったので、屋までに冬物衣料と食料を持って学校に集合との事。さあ大変だ。持てる物だけでも何とかまとめ、夫が帰ってきてもすぐ送れるようにと、汗だくで片付ける。ご飯を炊かなくては、と思いながら外を見るともうぞろぞろと皆道を歩いて行く。「急がなくては」、と朝のご飯を握り、寒いときの用心に毛糸ものをいっぱい詰めて、一幸にも幸子にも持たせる。大切なものは一つにまとめ、着られるだけ(五・六枚)服を着込んで洋を背に二人の手を引いて、家の戸締りをしっかりして学校へ急いだ。

のどかで豊かな生活が、突然、一転しました。終戦になる前にソビエト軍が攻め込んで来たのです。攻めてくる前の晩、「どうもおかしい」というわきが立ちました。「逃げなければいけない」と話している前日、関東軍の人たちは「転勤になりました」と言ってみんな先に逃げてしまった。関東軍が使ってしまったので列車も自動車もないので、持っている荷物を馬車に乗せ、私たちも逃げ始めたのです。守ってくれるべき関東軍はいないのにソビエト軍は攻めてくる。仕方がないので父たちは民間人だけで手元の銃を集めて、山にこもったのです。母の言葉によれば「死に行くのだと思うより、まるで出張を送り出すような気分でサヨナラをした」と言っていました。

山にこもった父たちは、夜が明けたら周りをソビエトのタンクに取り囲まれていた。タンクと戦く方法など誰も知らない。一発も打たずに降伏したそうです。それでシベリアに連れて行かれてしまった。関東軍で逃げ遅れて捕まった人たちと一緒にされてしまったのです。国際法上は捕虜を労働には使ってはいけないのですが、関東軍司令部はそれを認めてしまった。数十万人です。シベリアは何もない。攻めてくるソビエト兵も多くは囚人兵でした。父などは土木技師でしたから、本来はシベリアで長期間働かせられる可能性が十分あった。しかし、みんな、それを黙ってしてくれたので3年ぐらいで帰してもらえたそうです。

でも、その間が大変だった。隣で寝ている人が死ぬのがわかる。亡くなる前の晩にシラミが一斉にいなくなるのだそうです。体温が下がるのです。食べ物といっても黒パン一個ぐらいです。栄養失調になってポーッとしている。元気な人は弱っている人のパンを取ってしまう。取られた人は自分が食べたと思ってしまう。それぐらい意識がもうろうとしている。そして、そういう人は死んでいく。全体の3割ぐらいが亡くなられたと聞きました。零下40度か50度の土地ですからね。だから本当に便所のなかに落ちていたジャガイモの切れ端でも何でも食べたと言っていました。

モンゴル方面とシベリア方面の両方から攻められていた。開拓農民の方がたくさんいて、それは本当に悲劇でしたね。開拓農民の方は子どもが多い。「産めよ、増やせよ」で、子どもは労働力ですからね。

石の轍の馬車でゴトゴトと大草原を逃げました。秋ですから見渡す限り桔梗が咲いていました。そこに飛行機が来て銃撃をする。その間は草の中にもぐって隠れる。私は子どもで小さかったので、桔梗が人間の背の高さぐらいに感じられた。轍が桔梗の紫色に染まっていた。敵機が去るとまた馬車で移動する。ずっと後年まで桔梗の夢を見ましたね。そのあと無蓋貨車に乗って逃げました。そうすると敵は銃撃に来るんですね。私の前にいたお母さんが赤ちゃんを抱いておっぱいをあげていた。その人が銃撃でやられて血が私にバサッとかかった。すごかったですね。これもいつまでも夢に見ました。

「水が欲しい」と子ども達にせがまれても一滴の水も無い。まわらぬ口で洋がブーブーするので唾でも飲ませてやろうとするが、いくら努力しても口の中はカラカラで喉が引きつるだけ。隣の人の水筒にはまだ水が入っているだろうか？こんな時には「下さい」とも言えない、人の事より自分が大切なものだ。男の人がいてくれたらなあと思う。子どもが泣き、その体に巻き付けておいた着物も邪魔になり一枚一枚脱ぎ捨てた。腕に付けていた時計も取ってしまう。

何だか頭がボーとしてきた。思ってもいない事が口から出る。それがおかしくて笑う。他人が見たらまるで気遣いだ。私の血筋には気遣いの人はいない、などと考えるくらいだから気がおかしくなっていないと思うのだが。なんだか頭のゼンマイが切れてしまったようだ。こんな事が二日も続いたら本当に気が狂ってしまうかもしれない。

「さあ、降りるんだ」という声にハツとして目を開いた。どうしたことか何も見えない。真っ暗だ。「奥さん！私の肩につかまりなさい」と誰かに声を掛けられて、ようやく汽車から降りた。まるで高い船の上から飛び降りたような感覚だった。皆夜の線路上にへなへたと崩れ落ちる。もう歩けない。何しろ水が欲しい。まわりをキョロキョロしていると、これが本当に天の助けというのだろう。雨が降ってきた。大きな口を空に向けて、思い切り雨水を飲む。ようやく元の私に戻れた思いがした。喉が潤うと、皆起き上がって駅に向かった。まだ目元が少し引きつっている。

要するに、玉音放送も何もない。もう敗けたのはわかっていた。父は自分たちを守るために山にこもったままいなくなってしまった。シベリアに連れて行かれたのですが、そんなことは残った家族にはわからない。死んだものか、あるいはシベリアか、そんなことはわからない。残された大人は女と年寄りばかりです。とにかく哈爾濱まで戻るのは大変だったのです。

やっと汽車に乗れたが、子ども達は網棚に乗せ、四人掛けの椅子に六人座り、間には二人が立ってどうにも身動きが取れない。汽車の中で隣の赤ちゃんが死んでいった。奥さんが大声で泣きわめく。同情しなければならぬと思いつつ、無性に腹が立った。悲しいのは彼女だけではない、と口まででかかったが、ぐっと押さえた。家の洋も明日か明後日の命。洋はハシカにかかっていた。私はその時が来てもあんな様はしたくない、と心に言い聞かせた。

吟爾濱に早く着かないかと待っていたが、夜がきて空が明るくなってもまだ到着しなかった。死んでしまった赤ちゃんをおぶっていた人も、川の上から赤ちゃんを捨てた。ドボン、ドボンといくつもの音がする。捨てる人の顔も死人と同じ色だ。

哈爾濱に戻りましたが、元の日本人街を満州人が襲って来る。彼らは貧乏ですからね。それで何から何まで持って行ってしまふ。身ぐるみはがれます。量から何からすべて持って行ってしまふのです。電気も来ていないのに電球まで持って行った。私は木でできたタンクのおもちゃを持っていたのですが、それを取られそうになってギャーギャー泣きました。そのせいか、そのおもちゃだけは取られずにすんだのを覚えています。

ソビエト兵がマンドリンの形をした拳銃を撃って中国人を追い払う。そのソビエト兵の腕を見ると、いくつもズラッと巻き上げた腕時計をしている。しかもその時計の時間がみんな違う。彼らは時計が読めないのです。母は女性だとわかると危ないので、頭を丸坊主にして顔に墨を塗っていました。満州人の服を着て男のような格好をしていました。

いよいよ八月十五日。天皇のラジオ放送を聞く。泣く人もいたが、私は泣けなかった。負けるという事はうすうす感じていた。負けたのだ。仕様が無い。泣く気力も無いのかもしれない。明日がどうなる事か、考えも付かない。

玉子でも茹でて食べようかと勝手口から外をのぞくと、幾十人もの満人がワイワイ言いながら品物を持ち出している。何が始まったのだろうかと思っている間に、こちらにもやって来る。ワーワーと叫びながら箆、戸棚、雨戸までありとあらゆる物が、大水に流されたように無くなった。恐ろしくて押入れに入り中から戸をしっかりと握っていた。青龍刀を持った者、鎌を振り上げる者、黒く脂ぎっていて、映画に出てくるそのままの顔をしてわめいている。今までの怨みを晴らそうと何から何まで片端から持って行ってしまふ。暴動とはこういうものなのだろう。何も無くなってしまった。

ついには私達も引っぱり出される。Mさんが裸にされ、女はシミーズ一枚にされる。一幸にも手が伸びた。外を見るとロシアの兵隊が銃を構えて立っていた。「助けて」と大声をあげてロシア兵の後ろに隠れた。訳の分からぬ大声に満人たちはビクビクして、蜘蛛の子を散らすように逃げていった。その隙に私達も逃げた。

中国の、特に北満の人は文盲が多かったのです。日本人はほとんどが字を読める。彼らは、明らかに日本人は自分たちとは資質が違うと思ったのでしょう。それで、日本人の子どもをくれて言うてくる。しかし、男は仇討などする恐れがある。女の子は頭がよく、労働力になり言うことを聞く。小学校1年ぐらいの子がずいぶん中国人にもらわれていきました。それが中国残留孤児になったわけです。よく子どもを捨ててきたというような言いかたをされますが、実は、そのままいけばみんな死ぬと思っていた。そこに中国人が来てまんじゅう20個で子どもをくれという。中国人にあげた子どもは確実に生き延びられる。そして、まんじゅう20個で残った子どもたちが飢えずにすむ。だから名札を着物に縫い付けたりして中国人に子どもをあげた。だからこそ、戦後、「実は私が親です」と言って手を挙げづらくなってしまったのです。本当に壮絶ですよ。

二～三百人の満人がやって来て私達を一箇所に集め、ぐるりと周りを取り囲み、持っている物を出せと脅迫する。娘をくれと、手を引っ張る。取られたら大変！向こうとこっちで互いに手を引っ張り合う。娘が大声で泣き叫ぶ。泣いたので助かった。まったく日本人もこうなると哀れなものだ。

一人去り、二人去りして、夕方になってようやく家に入れた。中支那北安は昔、共産匪が農民になった所なので何をかわからない。支部の会議室に女子どもを真ん中に、男の人達が周りを囲む。「ピストルが五丁有るので、いざという時は覚悟してください」と言われる。「私もお願いします」と頼んだ。

終戦二日後の8月17日、北安の学校に收容されました。ひとつの教室に60～70人が詰め込まれ、頭と足を互い違いにして寝る状態でした。夜中にトイレに行くと、もう入る場所がない。夜もロシアの兵隊が女を探しにきます。明るくなると今度は時計をあさりに来る。3000人の共同生活でした。学校の校庭では、満人が昨日、略奪したものを市に出して売っている。

八月の暑さに身動きが出来ない生活で毎日病人が出る。はしかがはやり始め、2～3歳の子どもが櫛の歯が欠けるようにバタバタと死んでいく。病院の先生はいても薬は無い。長い二ヶ月だった。

何しろ便所に行くにも男の人の監視がないと安心して行けない。長い穴の上にコモがまいてあるだけの便所に二十人もの人が前の人のお尻を見ながら用を足す。一部が済むと「ハイ」と監視の手が拳がり、後の人がサッと跳んでくる。連れて行かれては大変なので、兵隊が来る前に用を足さなくてはならない。女の人は顔をわざと黒い泥を塗り付けて、お互いに見られた様ではない。それでも、黒いクーリーの服を着、真っ黒い顔をしていてもやはり自分は女だと思っているらしい。

小便の臭いなどで息が切れそうな汽車に詰め込まれ、哈爾濱を通り、2年前まで住んでいた新京にたどり着きました。平和な毎日を過ごした新京は、どこも暴動にやられ荒れ果てていました。そこで弟が亡くなりました。

家がロシア人に乱入されたので抱いて逃げているうちに、気が付くと洋が冷たくなっていた。この子は手が掛からない子で、2時間でも遊んでいた。こんな事になるのなら、昨年哈爾濱まで行って痛い思いをするトラフオームの手術などしてやるのではなかった。かわいそうに思う一方、親孝行の為に死んでくれたのかとも思った。小さい子ども3人を連れていた私はさすがに疲れていたからだ。近所の坊さん呼び、児玉公園の生前仲のよかったMさんの子どものお墓の隣に埋めた。辺りは日本人の墓標でビッチリ、何千人埋めてあることか。

翌日、花を持ってお墓参りに行って驚いた。「犬と日本人、入るべからず！」と大書してあり、すっかりローラーで地ならししてあった。戦に負けた者の悔しさが胸に込み上げてくる。可愛そうな洋、きりも無く湧き出る涙をどうすることも出来なかった。



とにかく葫蘆島(コロトウ)の收容所までたどり着き、そこから博多まで逃げてきました。私は哈爾濱に戻ったところから本当に何も覚えていないのです。記憶がなぜか欠落している。次に記憶に残っているのが引揚船でした。上陸前に赤痢が発生して20日間、船に足止めを食わされました。いよいよ明日、上陸というので最後のお米を炊こうと置いておいた。そうしたらそれを盗まれてしまった。そんなこともありました。

上陸すると頭からDDTを浴びせかけられた。そして、自分の顔ぐらいあるお赤飯のおにぎりがもらえた。母は子どもが食べ残すのを期待していたのですが、みんな食べてしまった。

島原の父の実家に2～3カ月いて、その後、母の姉のいた千葉の大原、房総半島の先っぽですね、そこに転がり込んだのです。私もそこで小学校1年に入りました。大原は米も取れる。地味がそれほどよくないけれど野菜もできる。そして、魚は豊富です。ですから、ひもじい思いはなかったですね。その子どもたちはみんな太っているのに、こっちはガリガリ。よくいじめられましたよ。母は私たちをそこに預けて豊橋に就職していました。縫い物の仕事でした。その後、父がムーンフェースの真ん丸な顔になって帰ってきました。それであまり父には向いているとは思えない食料品屋を大宮で始めました。頑固な商売をしていましたね(笑)。貧乏でしたが食べ物には苦勞しませんでした。

まあ、極限状態を体験したことで「どうせ一回は死んでるわ」という気持ちはありますね。それとね、ドリス・デイが歌っていた「ケ・セラ・セラ」の気持ちですね。あ、それから、1929年のミュージカル、「回轉木馬」のなかに「You never walk alone(君は決して一人で歩かない)」という歌があります。エルビス・プレスリーも歌っています。

嵐の中を歩くときもあなたは一人ではない  
嵐の向こうには輝く大空がありひばりの歌声が聞こえる  
だから顎を引き締めて真正面から向かって行け

というような歌です。酔っぱらうとよく歌いながら家に帰ります。この歌の歌詞も好きですね。

若い人へのメッセージ？ そう、今の人はあきらめるのが早いですね。人間、極限状態になると「できない」と思っていたことが「できる」方にスイッチが入ります。卑近な例でいえば、いくら練習してもできなかった鉄棒の逆上がり必死に練習しているとできるようになり、あとはずっとできるようになる。もうだめだと思ったところでようやく能力のスイッチが入る。ですから、あきらめるのが早いといつまでたっても本来の力が出てこない。

ちょっと優秀な子には、「お前ら、そんなにエリートじゃないよ」と言いたいですね。世界のエリートはもっとすごい。格差社会というのは自分たちが作っているのです。偏差値が低いとそれだけで自分をダメだと思ってしまう。あきらめてしまう。逆に偏差値が高いからといって、そのことだけで優秀だともいえない。勝手に自分たちがそう思って、自分たちで格差を作っている。その格差によって自分の成果が裏切られると思うとガクッとくるんですね。格差を作るのに加担するなと言いたいですね。

## 後記にかえて対談: 島田知保さんx岡本和久

岡本 | 8月は終戦記念日です。戦中・戦後を生きぬいた方々も数が減っています。極限的な状況を体験した方々の体験は、ある意味われわれの持っている貴重な資産です。その体験が風化しないように、消えてなくならないように文章の形にしておくことも意義があると思い、2回に分けて特集を組むことにしました。もちろん、とてもありがたいことなのですが、われわれはあまりに長く平和で安楽な生活が続いてきたために、それを普通だと思ってしまうようになってしまった。そして、「苦しい」とか、「大変だ」という基準がすごく低くなってしまい、ちょっとしたことで「もうダメだ」と思うようになってしまった。そんな気がするんですが。

### 「国」と「国防」を考える

島田 | 確かにそんな気はしますね。

岡本 | 私は1946年、終戦の翌年に生まれました。先月号で紹介した父の手記にもあったように、私の生家の台所の床には大きく焼け焦げた跡があったのを覚えています。また、家に砲弾や鉄兜があり、近所の東京工業大学には防空壕がたくさん残っていました。庭に掘った防空壕は小さな池になっていました。もちろん貧しかったし、粗末な服で学校に通い、決しておいしいとはいえない脱脂粉乳とコッペパンの給食で育ちました。しかし、まあ、そこを原点としてみればずっと平和が続いて経済が発展し、成熟し、それなりに豊かな国ができました。

しかし、一方で国防面での安全などは極めて意識が薄くなってしまっている。みんな、生活の安全・安心にはとても敏感なのにね。国防はアメリカ任せのようになってしまった。一方のアメリカは戦後もずっとどこかで紛争に巻き込まれている。60年代の中ごろ、私がアメリカの大学に行ったころは本当にベトナム戦争が激化しつつあるときでした。しかも、国民皆兵制です。ルームメイトが18歳の誕生日に徴兵局に登録に行ったのをよく覚えています。成績の悪い順にベトナムに飛ばされるといううわさがまことしやかに流れていました。徴兵制はなくなっても、アメリカはずっと戦争と隣り合わせの暮らしをしていたんです。しかし、日本にはこれが完全に抜け落ちている気がします。決して、戦争がよいと言っているわけではないですが、緊張感というか、危機感は絶対に必要です。

島田 | 国防に対する考え方はいろいろあると思います。でも、われわれの生活は決して戦争とかかわりがないのではなかった。ずっと米軍基地はあったわけですね。私の大学は外国人も多かったし、そのなかには基地の人たちもたくさんいました。でも、正直言うとやはり彼らが持ち込む習慣というか、行動は受け入れられないものも多かった。ドラッグとか、人身売買とかですね。韓国は徴兵制がありますが、やはり、家族や友達と隔離されて人間性を捨てる訓練を受けるというのは人道的にもよくないと思います。



- 岡本 | 確かに戦争することは決してよいことではありません。でも、われわれ、自立が大切といっている最後の最後にはやはり国の保護の下に入っている。日本国のパスポートがあるから世界中、ほとんどの国に自由に行けるのです。もし、パスポートがなく海外に放り出されれば、その人がどうなっても誰も守ってくれない。その一番基本的な生存を確保する部分で、国というのはまだ現在の世界では重要なのです。ですから、国というものが消滅するという事の恐ろしさをわれわれは忘れていると思うんです。玉音放送のあと、「もう、日本はなくなったのよ」とお母さんが子どもたちに告げる上田卓さんのお話がありましたが、これは本当に胸にグサッと突き刺さる言葉でしたね。
- 島田 | 国の存在はものすごく大きな保障ですよ。今は、国が守ってくれていることが当たり前のようになっている。もともと国境は人間が引いた境界で、時代によって変化するもの。どんな国もいつかは消えてなくなる。戦争で国を守るにしろ、非暴力で国を守るにしろ、相当の覚悟が必要です。スポーツのときとか、不満のはけ口としては、国が意識にのぼってくるけれど、国を守るために自分がどうするかということはほとんどの人は考えていない。
- 岡本 | 国が守ってくれるのが当然と思うのと同じように、平和も当然という前提でわれわれの生活が成り立っています。本当は平和ではなくても、平和を直視しない状態といったほうがいいかもしれませんけれどね。
- 島田 | 自分たちで自分たちの国を守るという、意志のある国とない国では社会の組み立てからがかなり違ってくるように思います。国を守るという意志を浸透させる際に、ボトムアップか、トップダウンかという違いがあると思いますが、私は今の日本では、やはり国民一人ずつの意識を高めるボトムアップ方式の方がいいのではないかと考えています。個人がしっかりしてくることで国という器もしっかりしてくるのかなと思うんです。
- 今回、記事を読んでいて、実は現在の状態は戦後と似た部分があるのではないかなと感じました。東日本大震災後の日本と戦後の日本。戦後の日本には焼け野原から立ち上がろうという、ある意味希望があった。でも今は、みんなちょっと疑心暗鬼になっている。国も方向性を示せないでいる。そのようななかでみんながつながってきているという面もあると思うんですよね。

## 「戦後」と「3.11後」の違い

- 岡本 | 3.11と戦後の違いで一番大きいのは、戦後のときは今後の方向性を示してくれる、というか押し付けてくれる存在があったということでしょう。アメリカというね。「これからはこういう風にやらなければいけないだよ」と針路を教えてください。功罪ともにあるとは思いますが道筋をつけられた。3.11ではそれが無い。
- 島田 | ビジョンが見えない。本当はわれわれ個人がビジョンを示さなければいけないんですけどね。誰かがグランド・デザインを描いてくれるのを、口を開けて待っている。
- 岡本 | なぜ、そうなっているかというやはり戦後のグランド・デザインも人に描いてもらったものだからでしょう。与えられることに国民が慣れてしまっている。
- 島田 | かなりいろいろとキーワードは出てきています。持続可能な社会とか、地球規模での共存とか。それらのキーワードが経済や国家、あるいはわれわれの腑抜けた楽観主義のなかでうまくかみ合っていないことがあります。
- 岡本 | 「そんなのきれいごとだよ」とか「現実の社会ではそんなのうまいかない」という既成観念で打ち消されてしまう。国家レベルでも、企業レベルでも、個人レベルでもキーワードが単なる概念で終わってしまっている。エクセキューションがないんですよ。政府が悪いのかといえばそれまでですが、でも、その政府を選んでいるのは国民ですからね。
- 島田 | 何かあるとみんな政局になってしまう。虚しいですよ。
- 岡本 | 希望が持てるのは、東北の悲惨な状態のなかから戦後を生きぬいたような力を持った強い人たちが出てくることだろうと思います。将来の日本のリーダーとなる人が、今回被災された若い方からたくさん出てくるでしょう。それを期待したいですね。

島田 | 戦中・戦後の厳しい状態のなか、歯を食いしばって生きてきた人たちがいて、その結果私たちが今こういう暮らしができています。安心な暮らしを謳歌するばかりでこのときに何もしなければ、前の世代の遺産を食いつぶすだけです。少し長い歴史感を持って自分たちの今を見てみると、これからの生き方や経済の見方なども変わってくるかもしれない。若い人にはぜひ、それをやって欲しいですね。

岡本 | 難しいのは、苦難が強い人間を生み出すとしても、今のこの豊かな日本が現実にあるわけで、急に「貧乏になれ」と言われても無理な話です。それではどうしたらいいのか、それが今回いろいろな方を取材して常に頭から離れなかった疑問でした。それで思うのですが、今、円高が進んでいるのは、ある意味日本の産業のグローバル化の遅れが引き起こしている面があります。もっと多くの企業が海外生産を増やし、生産拠点を新興国や発展途上国に移せば円高は止まるでしょう。でも、当然の結果として国内に雇用機会が減り、仕事を求めて遅れた国に出ていく人も増えます。その人たちは戦後の日本ほどではないでしょうが、やはり、貧しい生活がどんなものか、そのなかでどうしたら生き延びていけるのかということを学んでいくでしょう。これもひとつ経済の神様が与えてくれている試練なのかな、などとも思います。

## 「過保護」が「生き延びる力」を奪う

島田 | 80年代、90年代にはまだ若い人たちがそういうところに行こうとしていたんですね。その非日常的な生活がひとつのエンターテインメントだったということはあっても、彼らが今、NGOやNPOで活躍しているという事実もあります。わざわざ外国なんか行きたくないということを知ると、ちょっと大丈夫かなと心配になりますよね。

岡本 | 私は70年代の初めにブラジルのサンパウロで勤務したことがあります。当時のブラジルは今と違ってまさに発展途上国でした。バスに乗ればノミ・シラミがつく。町にはスリ・かっぱらいがいつも狙っている。私が駐在した2年間、わが家には電話がありませんでした。ブラジルの高層ビル35階にオフィスがありましたが、そのビルが火事になったことがあります。屋上に避難して消火を待ったのですが、あとで考えると危なかった。ちょうど、「タワーリング・インフェルノ」という映画が上映されているところでした。まあ、かなりの低開発国での生活でしたが、ブラジルで生活した経験は本当に人生で役にたっています。

島田 | 私も80年代、バックパックで世界のさまざまな場所に行ったのは貴重な経験でした。モノがなくても人間は生活ができるとか、日本が安全の代償で何を失っているとか、いろいろな発見がありました。安全ではないところでも人間は生きているんですよ。

岡本 | そう、安全じゃないから生き延びる力が出てくる。

島田 | 日本はあまりに過保護ですよ。電車降りるときに忘れ物の心配までしてくれる(笑)。

岡本 | ホームでは電車が来るので黄色い線の内側に下がれとか……(笑)。

島田 | アメリカのグランドキャニオンでは、一目見て落ちれば死ぬとわかるところには柵がない。そういう意味では二重、三重に安全網をめぐるしてくれることで自分の頭を使わない、自分の危機に対する感覚を使わないということになっている。

岡本 | 動物的な生命力というか、サバイバル力がひ弱になっていますよね。

島田 | もう一つは教育の問題です。学芸会で主人公のお姫様が5人も6人もいるというおかしな現象がありますね。徒競走で全員が一着とか。本当は社会のなかで自分の能力を相対化して考えることを止めてしまっているのです。みんな気位は高いけれど謙虚さが無い。

岡本 | 規格大量生産は工業製品だけでなく、子どももそうです。ですから、ちょっと人と違うと、欠陥品としていじめの対象になる。昔、足の遅い子は「くやしかったら勉強でこい」などうそぶいていた。そんなしづとさが欲しい。

- 島田 | ファッション雑誌で同じものを売りつけようとしているのに、キャッチフレーズが「わたし流」だったり「自分流」だったりする。これ自己矛盾ですよ。ある意味、消費文化に絡め捕られた箱庭のような文化になっている。だから、30~40代になって突然、仕事を辞めて「自分探しの旅」に出たりする。「自分」は仕事をするなかで探していくものです。
- 岡本 | 本当にそうです。どこかの場所に「自分」が落ちているのではない。自分のなかにしか自分はいないんだから。角界に「欲しいものは全部、土俵に埋まっている」という言葉があるそうですが、欲しいもの、自分も全部、仕事という土俵に埋まっている。必死にそれを掘り出せばいいんです。
- 島田 | もうひとつ顕著なのが資格収集ですね。いろんな資格を取って安心したり、成功した人の書いた本を読んでそれを真似ようとしてたり……。
- 岡本 | 3時間でわかるナントカみたいな(笑)。
- 島田 | そんなことで成功できるならみんな成功していますよ。解答がないのが人生です。でも、何かを習おう、教えてもらおうとする。
- 岡本 | 学ぶのはよいことだけど、近道、早道、楽な道を教えてもらいたがる。長期投資でのんびりやっていたらいいのに、みんなすぐに儲かる短期投資の方法を知りたがる。何かうまい方法があるはずだと思っている。
- 島田 | あるいは貯金しているから大丈夫という人や、将来の生活を考えるのが不安だから考えないという人もいる。でも、比較的豊かだとか、日本が安全だとかいう状態はあまり長くは続かないかもしれない。もっと切迫感を持ったほうがいいと思いますね。

## 「安全」の意味とは

- 岡本 | だからね、震災や原発の例でもわかりますが、何が起こるかわからない。もしかしたら隣の国が突然日本を攻めてくるかもしれない。たぶん、起こらないだろうけれど、絶対にないとはいえない事象に対して、もちろん国としての対策は必要ですが、同時に個人のレベルでも「万一」の場合にどうするかということは少しだけでも考えておく必要がある。それを国が何とかしてくれるだろうと丸投げするのは間違いですよ。「座して死を待つのは嫌だ」と思うなら「いざ」というときの備えを自分で考えておくことです。それが選挙での投票行動で表現されたり、自分年金づくりになったり、あるいは海外に口座を持って資産の安全を図るというようなことになるのではないのでしょうか。
- 島田 | アジアの人って金(きん)を身に着けているじゃないですか。何かのときに着の身着のままでも金だけは残る。そういう緊張感が日本にはあまりないですね。
- 岡本 | オスプレーの配備が問題になっています。私はオスプレーが最適な機種かどうか、それが本当に戦略的に必要なかはわかりませんが、少なくともアメリカは「安全」のために配備を考えている。日本の反対派は「安全」の面でNOと言っている。同じ「安全」でも全然意味が違う。
- 島田 | そうですよ。もし、NOならそれに対してどのような対案があるかという点が抜けている。東日本大震災のような悲劇も、日本では結構風化が早い。原爆を広島と長崎に落とされたのに、すぐに「アメリカ大好き」になってしまう。最近の若い子は原爆を落とされたといっても「間違っって落としてしまった」ぐらいにしか理解していない。だいたい、日本とアメリカが戦争していたことだって知らない。
- 岡本 | つい、60数年前のことが遠い歴史上の事件になってしまっている。保元の乱や応仁の乱とはいわないけれど、少なくとも、日清・日露・第一次対戦と並列になってしまっている。それとともにその極限状態における体験も失われつつある。極限状態で得た生き延びる力も伝わらなくなっている。それは日本としては本当にもったいない。それゆえ、この企画には意義があると思ったのです。
- 島田 | のんびりとしていても、いつ、戦争が起こるかなんてわからない。特に今のような経済環境ですとね。私は、よく「今の日本はワイマールだ」と言っているんです。他力本願のまましていると、忘れたころに災難がやって来る。声の大きい先導者が出てきてみんながあおられる。方向を示してくれてみんながその方向に向かって走り出す。

岡本

今回の聞き取り取材で感じたことをまとめておきましょう。一つは戦中・戦後の極限状態は決して過去のものではなく、これからだっていつ起こっても不思議ではないということです。東日本大震災はそれを思い出させてくれました。この点はとにかく忘れないでほしい。そして、そのようなときにでも耐えられるように平和ななかでも「生き延びる力」を養っておいて欲しい。極限状態を体験するのは難しくても、たとえば必死に仕事をする、発展途上国で何年か仕事をしてみるというのもいいと思います。また、真摯に東北の復興活動に参加してみる。少なくとも極限状態の疑似体験をしてみるとことは意義があると思います。

そして、最後に「いざ」というときに生き延びられるように心構えを持つこと。もちろん、個人として、自分を守るための手段を講じることは当然です。しかし、それには限界がある。やはり、国というものの存在は大きいのです。ですから、個人、生活者として少しでも国や企業がよくなるような働きかけを続けていくことが非常に重要なのではないかと感じます。多くの方が戦中・戦後の体験をあまりお話になりたがりません。今回、取材に応じていただいた上田さんご兄妹、田中さん、鳥山さん、宮崎さんに深く感謝したいと思います。